

洋書調所譯

壬戌八月

官版

海外新聞別集

日本使節巡行紀事

東都江左老泉館

海外新聞別集 官版



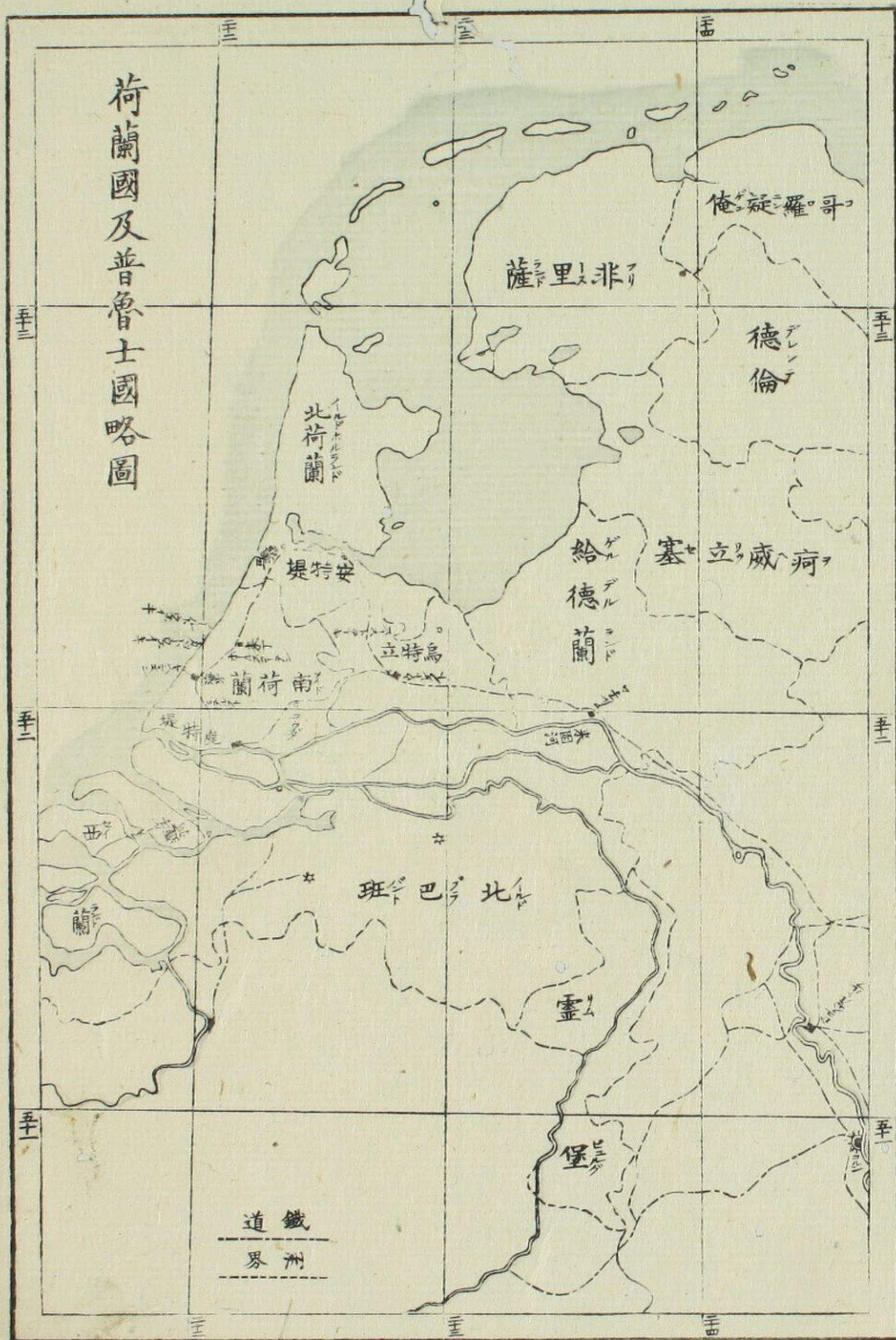
18
3
3

海外新聞

例言

新聞紙中日本の箇條は往々事の誤れるもの少ふらず是
も外國人日本の事情を通知せざるは因る然れども今原文
は従ひ之れを改めざるも其情態を存せんが為なり

昭和三十一年三月
編輯元文 贈



海外新聞別集

九月印刷

原本バタヒヤ新聞第二十六號

千八百六十二年第三月
二十九日即ち文久二年

壬戌二月二十
九日あり

○日本國使節の事

日本より歐羅巴に使節として遣す人員新に定む所左の如く
即ち

正使 勘定奉行兼外國奉行竹内下野守

副使 神奈川奉行兼外國奉行松平石見守

監察 御目付即横目役京極能登守

右の外其從屬として役人十八人醫人譯官橋及び家屋の監

官御普請奉行調役御勘定等及び僕十四人を携へ行く

同第三十二號同年四月十九日即ち三月二十一日あり

荷蘭のコンセルゼ子ラール今年第一月廿二日横濱に居り
一其日日本政府より歐羅巴に遣す使節英國の蒸氣船オ
ーデンに打乗りて江戸を出立せり此船はモコムドレ
ンヘイ指揮官とありて右の使節を香港及び新嘉坡を過ぎ
蘇士の方へ送れり

右使節も暫時埃及に逗留し尚英國の軍艦を以て佛蘭西に
送られ先巴黎に至り其後英荷普峨及び葡の諸國に至り其
後佛國の軍艦を以て日本に送り歸さるべし

英國のミニステルも日本政府に勸めて使節の頭は高位の
人即ち大名中の一人を遣らしめんとせり然れども其答は
曰く大名は此の如き命令を下す權あり依て外國使節は適
當せる人品を撰定する要ありと

使節の頭は命ずる力に守の稱號を必しも一國の領主と云
の義はあらず支配取扱看守の義あり是を以て國主及び神
祇之を命ずるありと但し大君より支配頭と立つる所の
人譬へば公領の奉行の如きも國主等之を快しとせずと雖
も大君之を命ずるときも其命名を受くるあり
右の使節及び從屬者も其數合せて三十五人あり

同第四十三號

同年第五月二十八日即ち四月晦日あり

佛國の公報モニテウルの中より日本使節のマルセイユルに來着せることを告げて左件を書き加へたり

日本使節を巴黎に到着し佛帝に謁見せし後江戸府の爲に益を爲べき諸件を吟味し且寫し取る爲に佛國の諸部を見物せりと云又日本使節を倫敦に至りて展觀場の開けるに會し其後諸所の告知を得及び歐洲諸地文明の次第を察して伯靈威也納及び彼得堡に行く目論見ありと云

ベルリン ウエーチン

ペートルヒニウグ

右使節彼得堡より止白里を過ぎ江戸に歸らんとするも成るべからざるよしあらず但し此道路を経て行くときを尋

シベリ

常の道路を経て歸る時間の只三分之一を要すべし

日本より往時西土に送りたる使節も千六百五十二年法王の許に送れり一使節及び二三年前合衆國に送れる使節のみ

但し法王に送りたる使節も元來日本政府より出せる者

にあらずして

カトレキ

加特力教の僧侶

キリスト教

基督宗徒に改心せしめたる目

本の大家より送りたるあり此使節を羅馬に至るは三年の時日を費し出國後八年にして日本に歸れりと云

モニテウル中専ら日本人の學を好み且伶俐にして性俊秀かゝることを稱賛し且亞細亞大陸の魯鈍遲鈍の民と遙に異

りと云へり

同第四十七號

同年第六月十一日即ち五月十四日あり

佛國の條は曰く日本使節巴黎斯に於て夏日の駑馬調練を見物し且宰相トウヘ子ルの宅に其調練をふしとる者と同く招待され又皇太子拿破崙の王宮に招待されたり
右使節の佛國政府に申出けるを冬日に至らむ早速佛蘭西船に乗り其本國に歸る望みふりと

同第四十九號

同年第六月十八日即ち五月二十一日あり

佛蘭西の條は曰く日本使節を佛蘭西のトイレリオン城に於て佛帝拿破崙に謁見す其詳記を公報モニテウルに記載

せり但し其中は歐羅巴諸府の風習は異なる禮式を記載するを見す○大君即ち日本の國土を守護する王の使節頭特派全權の宰相を佛帝に一箇の口上を述べ且大君より書増れる書翰を手渡せり

其口上中にも使節兩國取結べる條約の成就する慶賀及び兩國臣民の交益厚うるべき願望を述べたり又使節頭願ひて曰く佛國の軍艦にて日本に送歸し給ふるべしと此に於て佛帝直に左の返答をかせり

朕日本帝の代人は佛國に於て始めて面會するを喜悅せり朕其互に取極せしむる條約の兩國の爲に幸福ある功績あら

んことを望めり

開國に在る汝が旅宿も我民心を盡せると朕は於て疑を容れず又汝が受くる所の饗應又汝が得る所の自由我方に於て取扱ひ宜きと文明ある民の長處は屬するを汝は證すべし

朕汝を軍艦にて本國に送り歸さんことを希ふ汝歐羅巴旅行の愉快ふるを思出すとあらむ朕が意日本と最懇篤に和好せんとの願望ある證據を共に思ひ出すべし

同第五十二號

同年第六月二十八日即六月二日あり

第三月二十二日荷蘭のコンシルゼ子ラールを同國官府の

蒸氣船に乗りヒセノドミラールコープマンと共に横濱より出立して第四月三日出島に到着せり其已前第三月十八日コンシルゼ子ラールを出島より横濱に歸着せるなり右蒸氣船の指揮官も此度ニステレ官を免されて英國に歸るアールモク君并に有名の譯官森山多吉郎及び日本役人淵邊徳藏を同船に乗せ行けり是れ英國へ公書を齎らすためアールモクと共に乗船せしめて英國へ旅行せしむる爲かり但し右の三人も同日英國の軍艦に乗移り上海の方に出帆せり是れ來第四月七日驛船に乗りて上海を去り英國に旅行せんが爲なり

同第五十九號 同年第七月二十三日即ち六月二十七日あり

諸國雜記中より曰く此節荷蘭は於て尚倫敦に居留せる日本使節を深切に待遇する用意甚しと

海外新聞別集 九月印刷

原本アムステタム新聞紙第百二號 千八百六十二年四月十二日即ち文久二年十月十四日あり

日本國使節の事

日本の使節も種々の新聞を得んとを好み使節其旅館の格子窓より日本の旗章を垂れ掛けれど其前より人夥しく集りて絶へざりけり其始め佛國の政府其人の羣集するを制せんといけれど日本使節曰く夫より及むず佛蘭西の人江戸の旗を立つる時も亦然りと佛國政府を之を正理とも思わざれども使節の説に従ふとめ其儘より置きと

其使節第一等の人其同職及び書記官の如く一名あり其意を解譯するは竹を以て取巻られざる野の中は逍遙する所の君と云へりこれよても理解するを得るものなるや○此使節の爲は別は干膳ヒルメシを設けたるは甚と簡易あり其食卓上先一碗の飯の備へ其次水中は煮たる魚を列ずる外別は香湯スヒモノ或は他の食物を加へず其後肉を呈すれども使節の持越せる石灰は似たる粉末を以て悉く其風味を除けり而して此肉も飯は添へて食せり其他一二の果物を食し午膳を終りたり○使節をすべて歐羅巴の巧妙なることを歎美し特は酒を稱美して夥しく三鞭酒シヤウを飲みたり

此日の早朝レテムフスの選述家ロシイ君日本使節の前は出るを許され久しく日本語よて説話せり而して其話を特は測量學器械學及び星學の論ありき

日本使節と一人も婦人を携ふるとかゝり又其自ら携ふる所の旅袋バカール甚ど小なり然れども増物を入る箱を數多く持來り之を爲はマルセイユルレより巴黎迄の運賃を外國局より夥しく拂ひたり其數約するは三千フランク許あり

一人の僧常は使節に附添ひてすべて使節のふきんとする難問を防ぎたり○使節此地に到着せし已來許多の商人等其貨物を賣付んとて尋問は來れり○今早朝も尚一人來り

てハレンシーンの縁飾を二萬二千フランクは賣付けんと
ぜり然とも使節手許モトに一金も所持せざりし人甚と其
譯官を笑へり其譯官中の最も巧者ふる立廣作すらニス
トレブレニポテンチアレと云語をニスタロンブレニポ
デンチアロンと通弁しとりと

佛蘭西人も外は心配するところあるも拘もらず今他の萬事
を隠し置く日本使節と共に歡樂を極め佛國より出る新聞
中は多く此亞細亞人日本を云ふの事を載せ而も實は善き事の
み記載せり其故を此新聞より佛國內地の事件を説かず且
近時少く心配の事件あるも記載する程の事なきを以て

かり

佛國內地の制度及びトウロウセの僧正の令命は就ても余
之を説くを要せず又外國の事件の如きも尚之を説くす是
を以て新聞も只モニテウル會社之を説く時方は纔は世人
之を聞くを得べしとす又プロセスレ會社も新聞を出さ
ざるは因て世上は益をなすに少く是以て日本使節を今日
リオンは逗留せり其使節の名も笑をずして言ひ出し得る
者なく既に其長きむよりても衆人の慰とかれり使節曾
てマルセイユルレにて鐵道より上らんとする頃其從者の内大
危篤あるを唱る者あり是は因て其掛りの者之を送るは

甚しく心勞し、こり使節等既、蘇士の鐵道を旅して來る
ふれど、此度蒸氣車に乗ると初めて、非ず然る、此の如き
説起るも頗る解し難しとす、使節を容貌宜しきとふ、然ど
も事情を解すると甚ど妙なり、但し其内よも嫌忌すべき人
も之あり

二人の日本少年一人を十三歳より一人を十六歳ある
善く佛英二國の語に達し、これぞ之を以て其通辯官とふせ
り

人の通知せる如く日本使節を旅館をロウフレに投宿して
此に程能く暮せることを我聞けり、彼肉食中よても煮る鳥

を最好むと見へ、こり總て食物よも何よても胡椒を夥しく
振つけ食する、臨んで小刀及び肉叉子を用い、こり又衣服
及び其他の品物も極めて淨潔よし、且其日本人を頻り見
んことを好み、て絶へず來れる者を全く妨くるとふ

予が尚此に記して告知すべきも、使節今晚ロトマゴの練馬
場、於て演劇を見物し、又明後日も政事役所の公會を見物
すべきとあり、但しドウエルボン宮の廊廡よも惡言をなす者
あり、此公會をモルニイ氏故に設くる所より、日本使節は
佛蘭西政議の模様と紳士の鈕釦を付け、こり外套を服せる
状を見せしめんが爲なりと云

海外新聞別集 九月印刷

原本ロテルダム新聞紙第十二號千八百六十二年六月十三日即文久二年壬戌五月二十六日あり

○日本使節ロテルダムに到着せる事

第六月十四日我五月初十日の早朝より船手仲間の會所より近き上陸場より千萬の人群集りて此頃の天氣惡き故日本人兼て取極めたる時刻は倫敦ロンドンの大利より此處に來る哉否哉探と噂しつゝ其便りを待居たり○然るは此日本人の來りたるアルをノといへる船口よりハルンフリースロイスといふ湊に見ゆる趣役方の傳信機よて知らせありたり○此噂早速

鹿特堤の市中は弘まりゝるも日本人此湊より獅子と名付
たる役方の蒸氣小船は乗り移りテール子といふ運河を通
りて晝頃より此所へ来るからんと推察せり○此故は珍しき
日本人を見んとて諸方より集り来る者多く唯廉堤マース
町等其外其近邊も人込み甚しく後れ来る者も此邊は近寄
る事能はざる故日本人の通るへき道筋は群集して日本人
の鐵道の驛場は行くは大に妨けとあらんと見へたり
川の上り口の登り毛氈及び幟、木綿等にて飾りたる橋を掛
けて日本使節の上陸を仕易くかゝりたり○此上陸場より市
中の兩側は生立たる草花を植列ね其中間も彩りたる竿を

二行に立列ね此竿の上は和蘭想國の幟オラニ一の幟鹿特
堤の幟及び日本の幟を翻りたり○此日本の幟も白地に朱
を以て日の丸を染めたる者にて以前ヨングベールカテン
デーケの日本は在留せし頃此人より日本の役所より云ひ出
し日本帝王にカの幟印と差別して日本總國の幟印とせし
者あり○偕此兩側は立たる幟の間の道を日本人の入るべ
き館舎より到るまで毛氈を布き並べたり○加之堤の近邊又
も川中等はも夥しき旗幟を飾り立たる三本帆の大船又も
蒸氣船あり或も諸所近邊を漕ぎ廻る小船あり又街上はも
千萬の人群集して少の隙地もなく家々の軒下はも數多

の士女等集りて實^{アリサマ}は其形勢目を驚す許りふりき

第十時半の頃第四歩兵レヂメント隊の第四バタイロン隊
ゴウダより維廉堤^{ウィリアム}に來りて日本人の入るべき船手仲間の
會所の左側を警衛し又其右側を都府の兵士堅固に警固せ
り○其後暫ありて饗應掛りの役人口ウドンといふ人政事
書付預役バイレーレスと共に同様の出立よて都府年寄役
の案内よて兼て日本人を招待する處と定め置きたる赤書
院を通りたり○此赤書院も此館舎の門戸の通りは頗立派
に飾り付けたり○此赤書院も國王の畫像の下は紅の花
形を彫りたる歩障^{ツイタテ}を立て其向側よて和蘭と日本の幟を立て

たり又此書院の右の端よて和蘭の幟を立て飾り左の端よ
て日本使節三人の紋付けたる三本の幟を立て飾りて其美
麗言語も述りて此赤書院も實は花堂とも疑はる
許りふりき○此幟も三本共は地も天藍色よて白き紋を付
けたり第一番の使節竹内下野守といへる人の紋も周圍^{マハリ}は
林檎の如き者五ツ星の形をふり今一の星も其真中よりあり
て其側は笏^{シヤク}の如き者あり第二番の使節松平石見守といへ
る人の紋も大なる木葉三枚列りて其頭は芽あり又第三番
の使節京極能登守といふ人の紋も四ツの菱を四角に組と
る者あり○又其側は日本字よて左の書く如き付けたる幟を

立さる

和蘭人日本尊客の爲に謹て立之候

又此赤書院の隅に和蘭交易所の幟を飾り立て其外其書院中よある諸具も或は紅色或は白色或は青色等にて其美麗云々ん方どおなりけり

諸饗應の役人も暫く此赤書院に日本人の來るを待受けて居たりふ俄に千萬の人騒ぎ立て日本人の衆りたる蒸氣小船已に着岸せしといふ噂頻りなりければ饗應の役人も直様出て見しに日本人甲板の上を彼方此方と歩行き廻り

殊に其内の一人直に筆墨等を取りて何角寫し取る様子ありし後其者の英吉利語にて巧みに話すを聞けり此處にて日本使節を招待する設けの丁寧美麗なる模様を寫し取りたるよし○此處にて使節始總勢皆暫時上陸の用意を整へたる後和蘭國王の命にて英吉利迄迎へ行きたる饗應掛り役人の案内につれて直に上陸せり此時和蘭の樂人組も歌を謡ひ音樂を奏して其上陸を祝ひたり○日本人此上陸場より館舎に到る迄の模様を實に珍しき形勢にて茶色顔の日本人形を小男にて青鼠の上衣を着し數種の彩色にて草花を付けたる野袴を服し白足袋をまき茶色の草履

を用ひ大なる褰笠を被り奇麗なる大小を帯ひて皆一同に
歩兵の行装にて出立たる模様も實に奇妙なる形勢ありき
其後使節も都府年寄役の案内にて其從者を引連れて書院
の内より通し書院の真中より待居たる饗應掛り役人の前より來
りて腰を屈め笠を左の手より取りて挨拶をふりたり○其後其從者
も皆笠を脱ぎ腰を屈めて役人より挨拶をふりたり○偕一同
其座より付て後口ウト前より云へる饗應掛り役人といふ人日本使節より
口上を述べホフマンといふ人も此口上を日本語より和解し
て使節より傳へたり○其口上より日本使節の今度和解國より來
りたるこの忝き旨を申述べ和解と日本とも余國とも違ひ

舊來の好みもある事かれも實に信友ともいふべき趣を述
へ且右様の譯柄もある事かれも今度始ての渡來も彌交り
を厚くするに甚宜しうるべき旨をも申述べたり○第一番
の使節此口上の趣を篤と聞て直様其返答をふり和解の日
本通詞此返答を和解語より和解して饗應掛りの役人より傳へ
たり偕其口上より今度使節渡來より就て和解より深切の取
扱も使節始總體の者殊に忝き事より存し就ても日本と和解
の好みも二百年來の事かれも決して和解の事とも余國同様
よも存し申さるる旨を申述べたり
諸人此使節の返答を聞て兼ての噂とも大に相違して日本

人を決して頑固よりとまりて安んずる外國人をいやむる等の事なく其口上も取廻し等も實に丁寧に行居き理非も善惡も能く辨し居る者といふとを始て承知せり○殊に使節三人の饗應掛り役人は應接せし模様並都府年寄役は深切なる應對をふしとる模様も實に日本の能く開とる證據の第一ありき○其後直様日本書記方の一人筆墨を以て立ち和蘭人に向て聊々恐るゝ氣色もなく此書院の飾り立の模様歸着の上委細日本大君將軍家へ申上度候間一々承知致度旨を申述て此飾立の寫取りは取掛りたり○此一人の者此書院に誥合せとる諸役人の役名を承知致し且其壁際

に掛りたる畫像も何人の像あるや承知致し度旨をも懇望したり○其側は居とる人委敷其返答を爲して彼是の事を委細に話したり○其後彼一人其側の人に向て我等此所より來りて數多の美麗なる貴女子を見とる事を決して忌むる様記録し置くべしと云ふたり

諸其後日本人に向て暫時休息してを如何哉と尋ねて日本人の常より好める茶菓子其外煙草道具等を出して頗る懇切の取持を爲したり○但し使節始總體旅行の勞れよて早く

海牙

和蘭の都にて國王の居る所

に到りて休息しとき模様あるを見取り

し故兼て用意し置きとる乗車を與へて之より乘らせたり○

第一番の乗車も日本の使節三人並先年日本よりありて交易奉行の役を勤めたるドンクルモリス乗り第二番の乗車も以前日本より行て其土人と交りたる人よて當時海軍甲比丹を勤むるヘルスレーゲン乗り第三番の乗車もホルマンと云へる學頭第四番の車も屬國掛りの大役人も四ルデンと云へる人乗り又日本使節は従ふたる大役人も四五人づゝ分れくよ此四の車は乗り其外の日本人又を和蘭人も此余の車は乗りたり

凡第一時頃使節の車鐵道の問屋場より到りよ其所の役人等大よ此來着を祝しとり其外此鹿特堤の道筋よても此道筋の支配役等皆其來着を祝しとり

暫くありて最早蒸氣車を出さんと思ひよ平日通行の蒸氣車第十二時半過よ通るよを聞て暫時待合せたり偕其待合せの間使節三人を第一番の番部屋より入りて其所より丸き卓子よ向て場所取り其外の大勢の人を壁際よ場取り其外残りの者を第二番の番部屋より入りて坐しとり此土地の士女等日本人を見んとて此所より來りよ此問屋場の支配役人等少しも制するよおく此内より入りて日本人を見る事を許せし故よ千萬人の士女殊よ第二番の番部屋より入り來りて或も日本人と名札を取遣りするもあり或も

手真似をかりて話をするもあり或は和蘭語英吉利語等を
知りたる日本人を頻り其語を用ひて話杯をかり又日本
人も奇妙なる色の紙或は日本の烟草其外珍器珍物等を取
出して和蘭人は遣り其代りは和蘭人より名札或は卷烟
草其外夫は附きたる道具等を日本人は送り杯して實は其
親しき形勢を十年も二十年も交りたる人と聊も異なる摸
様を見へざりけり

右様の事にて一時斗も休息して茶を飲み烟草を吸ひたる
後蒸氣車を出すといふ相圖あり故第二時少く過ぎの頃
使節等頗る大悦の模様にて結構なる蒸氣車に乗り海牙を

さして乗り出したり

蒸氣車はも問屋場より和蘭と日本の幟を立てり

日本使節其外夫は従へる役人の役名並姓名等左の如く

第一正使

竹内下野守

第二副使

松平石見守

第三組頭

柴田貞太郎

第四勘定

日高圭三郎

第五目付

京極能登守

第六徒目付

福田作太郎

第七調役

水品樂太郎

第八調役

岡崎藤左衛門

第九普請役

益頭駿次郎

第十定役

上田友助

第十一定役

森 鉢太郎

第十二同心

齋藤大之進

第十三小人目付

高松彦三郎

第十四小人目付

山田八郎

第十五通詞

福地源一郎

第十六通詞

立 廣作

其外翻譯方醫療方兼帶之者兩人并醫師兩人其外使節等の

家來十一人贈物宰領方五人都合三十五人あり

諸役の順原文甚誤

れ總て日本使節旅行入用を皆其土地よりて賄ふより佛

蘭^{ハリス}匠の巴^大都許^都よて使節の入用日く凡四萬五千フランク

凡^我我^四三^千兩^程より五萬フランク^{凡^我我^五十^三百^程}位ありより

夫故佛蘭西人民後よ此入用を出す事を嫌ひけれど日本人も甚ど氣の毒と思ふて先くよ足を進むる事を好まざりよりよし尊ありき

海牙に到着せしより逗留中の事

第十二時頃鹿特堤より日本の使節一時半許鹿特堤に留るべけれど第一時より第二時の間よ海牙の都に到るべし

といふ知らせありとり夫也へ海牙よても追くよ其待請の
用意をふして問屋場の前よ左の如く書付たる幟を立てと
り

和蘭の都よて日本尊客の爲よ謹で之を立て候

其後直よ都府年寄役饗應役并評議役等諸人問屋場よ集り
其外海軍掛執政都府の軍奉行並物頭ウルフレニキとい
へる人其外政事掛并軍事掛の諸人等も集れり○使節同勢
の通行すべく道筋よもグレナデール島ののバタイロン四

隊と並よヤーゲルといへる隊備へヒイーゲンスプレイン
と云へる處よもダラゴンテル備ののレスカドロシ四隊備
へとり○其道筋の飾り立實よ善美を盡せしゆへよ其見物
人夥しくベルヒエと云へる旅館迄も實よ寸隙の地もあ
りり程ありき○使節の鹿特堤より來る事屋刻せしゆへ
よや見物の人彌増よふへて其羣集混雜云ん方ぞありけ
り○其後鹿特堤より海牙の問屋支配役人よ使節の乗りと
る蒸氣車の出立せし故第三時の頃よも海牙の都よ到着す
べしといふ相圖ありと

斯て日本使節等海牙の問屋場よ到着し其前よて蒸氣車よ

り下り案内よつれて第一番の番部屋に入りけれども都府年寄役の者日本使節よ向て能こそ渡来しとりと挨拶し終りて市中總體の口上かりとて使節等海牙府に在留するときと都下の者總體の大悦斜からずと申述べ和蘭の日本通詞此口上を日本語と和解して使節等よ傳へけれども第一番の使節其返答の爲よ丁寧と腰を屈めたり

其後暫くありて使節等夫々乗車よ乗りとり○第一番の車よと都府の軍奉行并都府年寄役乗り其外の車よと役人等使節と共に乗りて丁寧なる取持をかり又其外の車よと使節よ從へる諸役人從僕等乗れり(夫より此行列ワーゲン

町五イ子町ホーグ町ブラーツランゲフエールベルクコルテヤールホウト及びボスカント杯といへる處を通りて行きしと樂人組も其脇よ付て頻りよ悦もしき音楽をあり又道筋よと千萬の見物人群集して悦もしき聲を發して此行列を祝ひたり○日本人の珍しき顔色容貌よと實は和蘭人一人も驚うざる者をかりり程あり但し又日本人の才智勝れし事よと誰も能く氣附たり

諸其内よベルレヒユエといへる旅館よ着きとりしゆへ役人等使節を案内して其館内よ通しとり○其後役人を暫時其館内よ留り居たりしが使節等一同今日の取持方の行届

きこるを満足せし様子を見て其後此旅館を去りたり○殊
よ此旅館の飾り立如何よも結構美麗を盡してありしゆへ
日本人の満足斜あらざりき○此館内の尤も表立たる坐敷
を殊よ結構ある者よて其飾立も一形ならず或も千萬種の
美花を以て飾り又も名人の作よて草花の彫物をふく加之
色々の旗幟等を立て其間の處よもオラニ^{當時の和蘭}家
歴代の畫像を掛け其外廊下階子も勿論館舎の表構に至る
迄残る處ふく草花を以て飾り此表構の上よも日本と和蘭
の幟を翻したり○其外海牙^{オランダ}より來着より旅館に入る迄の間
樂人組の者大鐘を打ち之よ合せて面白き歌を謡ふて祝し

たり○行列の前後を警衛して旅館迄到りたる騎兵隊を使
節到着の後直よ歸り唯使節警衛の爲よ設けたる番兵隊の
こ此旅館よ留れり○英吉利佛蘭西等よても其饗應よ善美
を盡し日本人を悦ませし事數りぎりあるべけれども其
取持の深切よして實よ心底より出たる饗應といふを恐く
も我和蘭の如き處をあるべしと思はる

偕日本人此旅館よ着て二日の間休息をふし十七日^{我十五日}
より諸處の表立たる場所を見物よ出たり其話次よ委し
十七日^{我十五日}我和蘭王妃の誕生日あるゆへ球投遊びの場
所よて夥しき人集りて軍の狂言をふしたりしよ使節等も

乗車は乗りて其祝ひの場所を見物しり○此時騎兵隊使節等の嚮導とありて其旅館より出て此狂言終りて後又此使節等を引連れて本の旅館に歸れり○其次は使節等珍物奇器或は圖畫等を納めたる寶庫を見物せり○其幕方は至りて森林の中は暗夜も白晝と疑えり、程の萬燈をとぐりグリーン子ンといふ人日本人を誘ひ萬人の集りたる天幕の内は導ひて見物せしめり○日本人も此十七日を今日迄の中よて一番悦をき日ありと云ひ又殊は好て婦女子と交り遊びて色々の物を取り一杯しり○又其後再び萬燈を見物して本の旅館に歸りり

十八日

我五月十一日

ニは使節等二箇所の製造場を見物せり其

第一の製造場もエントハウエンといふ人の持場あり○此製造場の内は諸處は日本人饗應の爲は色々の事を書付けたる者杯を置き又其外は日本と和蘭の幟を立てり○諸使節等ペルススレイケントンクルキユルヒスミツレル及び都府年寄役等の案内につれて此製造場は來りければ持主エントハウエン此輩を招待しり

此製造場の内はある住居家の高樓よて暫時休息あり日本茶をいせし後暫くありて重荷を揚る爲は鐵よて作りたる桔槔ハチツレミを使節等に見物させ其外追々大なる鑄物部

屋よて日本人の感心する様ある事のみを見せたり○又小
き鑄物部屋よも使節を誘ひ行き謹んで日本人よ服すとい
ふ語并日本尊客の渡來を祝すと云ふ語を文字よ鑄出しと
りし其手速^{ハヤ}かる事よも日本人一方からず膽をつぶり殊
よ桔槔の速うかる働を見て其働く理おどを詳よ聞取り
故よ其驚き實よ尋常よも見へさりけり

右様色々の珍らしき物杯を見物させたる後又使節等を高
樓よ連行て此處よて暫時休息をさせたりし其時使節一
始め總勢の者共見物しする物の話をして皆褒めざる者も
ありけり○其後此製造場よての取持頗る結構あるを謝

せんとして使節よ附添居する和蘭の役人等其姓名并使節等
の姓名をエントハウフエンの内室の所持しする手扣帳よ
書付けたり

此事終りて始め入來りする時分の通りよ頗る結構ある取
扱を受けて此製造場を去りたり○偕今此製造場を去る時
分使節等并附添居する役人共皆一同よ取持の深切よ行届
きたる禮を丁寧よ述べたり

又第二番の製造場を尤大ある者よて其名をプリンスファ
ンオラニーと云へり○此製造場よても使節等其門口迄到
りし時分此持主ホツといふ人とクトルデンといふ人其

所迄迎へ出たり○諸其處より此持主と此場所の造營方の
者として使節等を誘ふて道具仕掛けの設けある部屋へ入
れたり○此處へ入り廻り廊下を通りて其所は於て廻り板
の上にて椿車の心木を造るを見て使節等大よ之に感心し
其後又第二番の蒸氣道具のある處に到りて其道具を見物
したり○諸其次に鑄物場へ到りし此處にて鑄物師使節
等の見る前にて速に謹て日本人は服すといふ語を文字に
鑄出したり○諸其文字を鑄出したる節其仕事をふしとる
鑄物師等皆大悦の模様にてフーラフーラ祝ひ言と祝ひと
り○又其後第三番の蒸氣道具及び鐵道に設け置く橋を造

るを見物し又其蒸氣仕掛の道具等を以て頗る重き荷物等
を速に二階三階等へ上るを見て使節等殊に驚き感しとる
模様ありき○其外又使節等の見る前にて莫大なる車の心
木を蒸氣道具にて造作もかく此所彼所^{コ、カシコ}に動かし或は桔槔
にて高く引上げ杯ふして見物せしめたり○斯て色々の見
物も済しうも使節等も此製造場の持主より丁寧な禮を述べ
其姓名を外國人姓名録といへる帳面に記し附添ふとる役
人等此口上を和蘭語と和解して持主は傳けられた職人等一
同は聲を揃て能く參られて大悦かりと返答するを聞つ、
使節等一同此處を出たり

十九日我五月廿二日も使節等大砲の鑄造場を見物し行きければ此處もて軍事掛り執政役使節等を招待し夫より鑄造場し連れ行き一挺の古き大砲を出して之を鋸う夫より青銅を加へて直様は一挺の新砲を鑄て見せしり俱箇様の事を今迄外國もて數度仕損どりしと和蘭もて聊も仕損ずる事なく十分能く出來しり○其外日本人を引連れて此製造場中残る處なく見物させしりも使節等始一同皆満足せし趣を告げ厚く禮を述て去れり

其次も使節等ミーリングといへる人の持てる石版場を見物し行き此處もて暫く留り居て圖畫を石板し押すを見殊

は圖畫の彩り方種々の色一時も出來るを見て大に感心ししり

其後も仍日本人石板の道具仕掛を見物せんことを懇望せしりゆへ色々の道具を十分も見せしりも使節等も大に満足しし模様もて其中もて三四人の者紙を取り各自分々の書判を書きしゆへ夫を直様日本の紙し押して其當人等も與へしり○斯くて日本人も其満足一方ならずと見へ再三禮を述て遂に此場を出しり

晝後に至りて使節等又地形寫し取場し行きしは此處もても軍事掛り執政役の者此輩を招待して色々の地形を寫し

取る模様を見物させたり

其外又諸處を見物せんとしてパールマンといふ人の持てる
諸品の製造場ベーといふ人の持てる時計の製造場或をメ
ーウスといふ人の持てる燈籠の製造場並にニーツホフと
いふ人の持場ある書物賣買場等に行きて色々の珍物珍
器を見物せり

其後使節兩人並に夫より從へる輩饗應掛り役人より誘われて
セーネニンゲンといふ浴場に行き又ゼーレストと名付け
たる館舎に行きしふ此處にて日本人の來るを見て直様
日本の機を立とり斯て此處に暫く留り休息をおして和蘭

の海魚を見物せし後パトボイスといふ處を通りて海牙の
都に歸りたり

使節等鹿特堤を見物せし事

海牙より便りありて策六月廿日我五月廿三日日本人鹿特堤を

見物に参るべしと告け来りしを其當日より早朝より日
本人を見物せんとして悦び勇んで来る者其數を知らず實に
其群集云ん方ぞかりけり○右様は和蘭人等日本人の渡
来せしを悦んで勇み立つ所謂をエウロツパ歐羅巴に數多の強國あり
雖とも二百年來日本人と交りを結び居る國も和蘭の外
一國もふきぐ故あるべし○問屋場の所も日本と和蘭の

幟を立置ければ其處より尤多くの人群集して恰も敵軍の
十重二十重に圍みさるる如く見へたり○又日本人の通る
べき道筋は都府年寄役并奉行評議役或は鐵道掛り諸役
人其外今度饗應の事と預る諸人悉く集りたり○然るは第
十時の頃兼て國王より日本人案内方を云付られさる役人
共使節三人並は夫は從へる同勢の内十三人の者共を誘ひ
尋常の蒸氣車に乗りて海牙より來れり但し此車を王家所
持の車あり○斯て一同の者直様蒸氣車より下りければ此
鹿特堤支配の諸役人使節等能くことを參られさるといふ候
抄を述べ且都府年寄役を總代として和蘭と日本を舊來交

り厚き國かれむ今日使節等此處に參られさるる此地の者
一同殊は大悦に堪へさる事ありといふ事を述べ通詞の者
此口上を日本語と和解して使節等と傳へければ上席の使
節竹内下野守といへる者直様忝く存ると云ふ返答を丁寧
にありさる○諸此挨拶も済ければ都府年寄役も使節等の
案内とありて使節等を兼て用意し置きさる乗車に乗せこ
ールシクルといふ處より鹿特堤の市中を通りてボーム
ビーといふ處に到り和蘭蒸氣船仲間の會所の前なる濱邊
に兼て日本人を乗する爲は用意し置きさる和蘭の船貸仲
間の持てるヨインフツレといへる船に使節等を乗せて直

様此濱邊を乗り出しより諸此船を第一より目立場所より日本の
の幟を立て其外の場所より日本の幟其外和蘭オランダニ或
も鹿特堤等の幟を頗る奇麗に立飾りする者にて實に目を
驚らす許の美船なりき

此處よりローノールドに到る迄商賣方評議仲間並に製造
方評議仲間の者等此使節の案内となりて行き一其節使
節等より向て此度貴君等の鹿特堤に來り給ひても後來日本
と和蘭の交易の盛なる大本なりとて鹿特堤の商人等一
同より別て大悦ふ存すると云ければ使節等此口上を聞て我
等此鹿特堤に來りて其満足斜からず且此以後日本と和蘭

の交易も相違なく日頃は盛なるべしと存すると返答し饗
けり

諸ローノールドにて其湊にある鍛冶場の脇に和蘭總國
の幟を始め其外鹿特堤並日本の幟等を立て飾り又其側か
ら打開けたる地面より大ひかる天幕を立て其外色々善美
を盡して飾りたり○諸其天幕の前面の頂より幟を立て
其幟より上の方より日本の紋を青色にて二附け其下の方
より商賣仲間の印を附け草花を畫き且日本字にて能く來れ
り能く來れりといふ事を書き○又其下は金字にて和蘭
の蒸氣船仲間と書付たる幟を懸け此幟の片端より和蘭と

名つけたる紋板紋の附たる板を附け又今一の片端よも日本
と名附けたる紋版を懸けたり○又此天幕の後の方よも和
蘭の紋を付けたる幟を立て其外天幕の前後左右は諸外國
の幟を翻し又其中よも頗る立派なる敷物を敷き其上よも
立派なる天井を張り椅子手摺り椅子或卓子等を置き其脇
よも草花等を植へ其中よも饗應の爲は美酒佳肴を備へ
る卓子を設け加之日本人は烟草を吸とする爲とてへ子
チヤ燈といへる彩色したる燈籠を設けゆへ此天幕を實は美
麗を盡したる書院の如くよして人々感せぬ者もかりけ
り○又其端の處よも普魯士國の小船ありて其中よも日耳
ノロイセン

曼諸國の幟を立て又其外此所彼所は數種の幟翻りたり
斯て右様日本人饗應の設けも全備せしむるにノーバド
の士女等夥しく日本人の來着を見んとて疾くより天幕の
近邊を被方此方と徘徊せる内は鹿特堤より大砲の相圖
て日本人の乗りたるヨインフツレといふ船唯今濱邊を出
帆せしといふ知らせありけり○此大砲の音を聞て見物の
爲は寄り集りたる人濱邊より出て今や遅しと待ける内は數
艘の小船は數多の人乗り込んで來るを見れも果して日本
人商賣方評議仲間并製造方評議仲間等の案内にて濱邊
著き直様其處より上陸したり○斯くて使節等一同案内

つれて天幕の處より行き使節三人も手摺り椅子のある處の
場取り其外一同の者も皆其周圍（マハリ）の場取りて直様烟草道具
を出して烟草を吸ひ此處にて暫く休息をかりたり○偕其
休息の間は千萬の人日本人を見んとて其所より集り來りけ
れも日本人も頗る大悦の模様にて和蘭人と或も手眞似か
どをふし或も巧みからねど和蘭語英吉利語杯を以て心易
けは話振ふし暫くありて後數種の道具仕掛の雛形杯を見
物に行きしは蒸氣船仲間の製造方支配のオールトといへ
る人此處にて道具術に就て日本人は色々話し聞せしむる
日本人も大よ之は感心しけり○斯くて其見物も済しゆへ

使節の來渡を祝ふ爲にとて饗應の酒食を出しければ使節
等一同此處にて其饗應に預り終りて頗る丁寧な腰を屈め
て其禮を述べ夫より皆一同に散歩するらば細工場を見物
し出りけり

斯くて案内につれて先第一番は鍛冶場より到り此處にて鍛
冶師等大なる鐵塊を蒸氣仕掛の大槌にて打碎きて色々
の道具を製せるを見たり○又其後鑄物場より到りければ此場
の鑄物師等頗る奇なる仕掛にて鑄解しする鐵恰も地中よ
り湧き出る如くありて日本人はノールトは能く來り
たりといふを文字に鑄出して見せければ日本人一形を

らず感心して附添ふところトンクルモリスを以てテール
トよ色く鑄物の事を委細に聞けりむテールトも至りて丁
寧に其返答おせしゆへ日本人一同頗る大悦しその模様
て歸りたり○其他蒸氣仕掛の圖畫場或も其外を見物し其
後鈍道具場に入り此處にて細工人此鈍道具にて瞬間^{ミダク}
大なる鐵屑を挽くを見て殊に感心し此道具の處に暫時留
りて此鈍道具にて尋常の鈍道具に比ぶれも半分の時
て同一分量の鐵屑を挽くといふを聞て大に驚き感心し
り○其外ゼイランドといへる船の螺旋^{子デ}或もプリンセスマ
リーと云ふ百二十馬力の蒸氣船とモラカオといふ二百五

十馬力の蒸氣船を望見し並當時フルレンゲンにて製造し
掛り居たる船等を見物し殊に蒸氣舌^{蒸氣道具}者も使節等
頗る念を入れて穿鑿したり○其外案内につれて此所彼所
を見物し行きし使節等感心仰天せざる處を一所もあ
りけり

斯て散歩も済けれも又案内につれて天幕の處に歸り此場
よて又暫時休息をしりし彼のオールトといふ人別離
の爲として又酒を出して使節等を取持ち使節等に向て日
本と和蘭を數百年來好み厚き國かれむ此度の渡米を余國
人とも違ひ別て大悦に存す云々といふ事を云ければ使節

等此口上を聞て貴諭の如く實は日本人と和蘭人も舊來の
信友とも稱すべき者なれど以後千萬歳和親を破らず永く
交りを結むんことを冀ふと返答して歸りけり
諸第一時の頃日本人の乗りこるヨイン多レといふ船五
一ノールドより歸り來りて其後又乗車は乗りてオーステ
レーキストームデマールと云ふ蒸氣仕掛の道具場所を遊
覽し此處まで色々の蒸氣仕掛の道具の働きを見て^か伶俐日
本人も速に其理を解し頗る之は感心せり○此時製造方丈
配の者ローセ并はタクといふ人日本人は此蒸氣の働きの
理を詳し諭したり

此蒸氣仕掛の道具を遊覽して歸りたる後啞聾の子等を教
導する學問所を見物し行きたり○此處まで此學問所支
配の役人使節等をヒルスといへる大學頭の部屋は招待し
たり○偕此處まで大學頭を使節等と和蘭まで此學問所を
建る和蘭人の仁心の大なる所を詳し云ひ聞かせ夫より啞
或も聾の子供は唇の動う様或も顔面の模様杯まで物事
を教諭するを見せ又其後大學頭を使節等を誘引して今普
請し掛り居る所の學問部屋等を見物させ此處は使節等を
暫く留らせて十歳斗の小兒一人を使節等の前より出て鹿
特堤の聾啞學問所の諸生等一同日本諸君の渡來し就て大

悦斜あらず殊に此學問所を見物に來り玉ひし我等尤満
足する所ありといふ事を板の上は書付させて見せ其外上
達しる諸生兩三人を使節の前は出して日本の地理の事
を板の上は書付させ杯して見せけれども使節等一同頗る仰
天せし形勢よて如何して啞聾杯は右様の事を教込する者
ある歟國王の仁政も勿論和蘭人の仁心も實に感心するに
堪る事あり杯と互に話し殊に小兒の側は來り可愛らしき
童哉と頻り之を褒立たり○此學問所は來り居る士女
等皆此日本人の頻り感心するを聞き居たり○右様の見
物も濟し故使節等童謠其外民間の謠杯を吟して聞かせ

しうを使節等一同啞聾の小兒の教諭行届きし事も勿論其
外謠の事等よ就ても總て感心は堪る許ありと云ひ厚く其
禮を述とり○斯くて何も角も全く濟し故外國人姓名録と
いへる帳面を出して使節等渡せしうを使節等一同其姓
名を此帳面は書きのせ腰を屈めて厚く禮を述つゝ此學問
所を出さりたり

其次は使節等コールシengelと云ふ處の病院

貧窮ある病
人を養ひ療

治すを見物は行きしモレワールといふ人の娘等出迎
ふて使節等を前坐敷は案内し此處よて饗應の爲よとして香
花を出しけれども使節等其花の香しき匂を嗅で頗る悦しげ

よ見へとりけり○斯くてモレワートルの娘等も直様此使
節等を誘引して蒸氣道具を見せんとて此坐敷より下の方
に降り此處にて蒸氣仕掛けの道具を以て病人を高樓に造
作もかく引上る道具を見せ其次よも又製造場は連れ行け
れど此處にてモプロウ・ホルといふ人此製藥の時其部屋を
竈にて温める仕方を使節等と委しく話し聞かせたり○其
次よも使節等を分析所は案内して此處を見物させ此處よ
り其脇に立て添ふとる處は連れ行きて解體部屋并琉黄湯
の浴場を見物させ又其次よも外科の療治部屋にて旋動す
る寐床を見物させ夫より又評議部屋は誘引して硝子ビイドロの箱

の中よ入置きとる道具類其外圖畫等を見物させとりけれ
も使節は附添ふとる日本の醫師等總て感心せぬ事をあら
りけり○其外又使節等は蒸氣風呂或は病人部屋杯をも見
せ斯て諸見物も全く済しうも使節等モレワートルの部屋
を見物し此處にて丁寧は暇乞をかりて出去けり

其次ふもホイマンと云る學問所の彫刻術の藝古所其外諸
細工術の稽古所等を見物に行きければ其途中にて市中の
人日本人を見んとて其同勢に附添ひ歩行く者幾千人とい
ふ數を知らず實は勇ましく形勢ふりけり○偕此稽古所
ても此學問所の支配役ラツメといふ人並其添役等使節等

を招待して先門第一番は日本の陶器を夥しく集めたる部屋に連行きて之を見せ其次は畫像部屋は案内して色々の畫像を見せ又其次は此學問所の大繪圖を入れ置きたる部屋並其雛形を納めたる部屋に連れ行き杯しければ日本人満足斜みらずして此處を出去りたり

斯て此見物も済しゆへ使節等此處を去りてバタニアゲノートレカプと云へる館舎に行きければ此處よても其支配役の人々使節等を招待しギタイパント並にカーレンと云へる醫師等此使節等の案内とありて諸坐敷を見物させ其後使節等は烟草を吸むしめ又其姓名を姓名録に書付させ

其後又使節は從へる人々を其隣部屋に連れ行き此部屋を暗くして其内は色々の物を寫して見せければ日本人頗る面白く覺へたりき○其後諸部屋にある道具等を見せければ使節等悉く心感せざる事なく殊に鋸ぎり引する轆車并水車の働き等を見て其力の太くして且速なる事を驚ろき又エレキテルの道具を見せ或は地球儀を廻し杯して見せければ日本人速に日本國のある場所を見出し得たり其次は又ウステレーキストームデマールといへる蒸氣仕掛けの道具場を見物に行き此處よて蒸氣仕掛けの車よて水を汲み盡すを見或は其外蒸氣道具の數種の働きを見と

り○此時ローセタクと云へる二人の者此蒸氣道具の働き
の理を日本人は委しく云い聞かせければ日本人すとぶる
感ぜざる者とあうりけり○斯て此處の見物も大抵濟し故
使節等又乗車は乗りて和蘭船手仲間の會所前へ行きけ
れと此處よて案内をふしる役人并評儀役の人々并オー
ルといへる人々相伴とありて使節等は食事をふさしめと
り

諸此會所の赤書院は行きければ此書院をも先日の如く仍
色々の美麗ある飾り立ありて其上は三ツの卓子を置き其
真中の卓子を使節の卓子とあり其外の二ツの卓子と外役

人等の卓子とありて是はも數種の飾り付をふし或は亞細

亞の草花等を飾り付けかどして其華麗實は云ん方どあり

りけり○斯て此處よて又年寄役の者使節等へ茶を出し蒸

餅杯を食せしめて後年寄役の者使節等へ向て鹿特堤よて

も諸君希くも我等へ懇切の情を汲取りて此後和蘭と日本

の交り益厚く日本の商賣船鹿特堤の湊は絶へざる様は致

されよと云ければ使節此口上を聞て和蘭人の深切なる取

持の禮を述べ加之以來和蘭と日本の親睦益厚くあらん事

と殊々冀ふ所なりといふ返答をふしり○斯て色々の話

も濟ければ年寄役の者も別れの爲よとて又膳部を出し暫

くありて食事も済し故使節等暇を告げて此處を去りければ諸人フーラフーラと三度祝しとり

諸使節等此處を去り一時又奇獸の飼置場に至りて千萬種の奇獸を見物し又トルレニスといへる有名なる詩人の像并其外畫工或も小説物著述物杯の立派ある像を見物すへしと勧めければ是より直に乘車に乗りて奇獸の飼置場へと急ぎけり

是まで諸所の見物の度毎に日本人を見んとて來る和蘭の士女等羣集せざる處とて一所もふりけり殊に此奇獸の飼置場よての群集といふも言語も紙上にも述べ盡

されざる程の事よて實に其近邊よても一步もそこぶ事能むさる程ありき○日本人も此士女等の群集するを甚快き事と思ひされども余り甚しき群集よて鬱陶敷き故に少く慰みよてもかして氣を引立んと思ひしはや種々の物を取り出して婦女小兒等と與へ杯して慰みたり

斯て夫れより使節等をマルチンといへる人の支配せる客館に行きければ此客館の諸役人使節等を招待し殊に三人の使節をも丁寧に取り扱ふて此客館の造營を企てたる仲間より出せる書翰を使節に出しとり○通詞此書翰を日本語と和解して使節と與へければ使節此書翰を一見して辱

き趣を述へたり○諸其應對も濟けれも使節等を各煙草道具を取り出して烟草を吸ひ杯し此處は暫く休息して慰みたり

諸此處にて暫時休息ありたる後使節等をマルチン并其外支配役人等の案内によつれて園庭は飼ひ置たる數多の奇獸を見んとて此處は行き獅子^尻、豹^或、象、猿其外奇鳥等を見物したり○其外又此處は人間其外活物等を喰ふ獸をも飼ひ置きてありしゆへ日本人も頗る仰天せし模様ありき○然るも前にも記せし如く日本人等と和蘭人の見物來るを甚悦へる模様ありし故此處までも日本人を見物來る

者幾千萬といふ數を知らず實は一步を進むる事も甚難義し覺へし程ありき去れども日本人も此園庭にて數百種の奇獸等を見物せし故斜ならず悦びたり○斯て此見物も濟し故使節等をマルチンの住家の前にある築山は行きければ此處は支配役人其外數多の婦女子等集り來りて使節等と共に頗る面白ろき慰みをありたり○諸色々の慰みをありたる後使節等マルチンの内室の畫きたる數多の畫あどを見てありし内は追々時刻も移りし故一同此場を去る用意をありたり

此の如き丁寧懇切なる取持ありし故上席の使節も通詞を

以て案内の人より種々厚き禮を述べ其外此饗應より出たる役人總體も宜敷く傳言し呉れよと頼みたり

諸此處より使節等又乗車より乗りて其近邊にある問屋場の方より行き又此場處より暫時休息ありて使節等と饗應の役人等と互に懇切に暇を告げ夫れより使節等一同頗る大悦せし模様より王車より乗りてうへり行きけり斯くて引車前車のよても笛を吹て日本使節鹿特堤の遊覽を全く済まりといふ事を知らせたり

諸處遊覽中數多の見物人日本人は附き添ふて日本人の遊覽を祝はる故使節一形おらず大悦せし模様ありき

海牙逗留記留中第六月二十一日我五月廿四日後の事

日本使節もボイテンホフといへる處の役所より和蘭の外國掛り執政役と會合談話せんとして廿一日廿二日の兩日其夕方より到りて使節其外同勢三輛の車より乗りて此役所より行きさうり〇二十一日より使節等議政上院と議政下院上下院共の事を論議の二部屋より暫くつゝ留り居たり〇使節等上院の部屋を去りて後前坐敷より暫くの間此上院の上席あるヒリプセといへる人と談話し此談話も程なく済けれと使節等も此饗應の行届きたる禮を述べ且スワンデレンといへる人の深切なる口上の辱きを謝し其外向後を日本と和蘭

と益々親しく交りこき趣を述べ懇々暇を告げて夫より下
院の部屋に到りたり○此部屋にては國益掛りの役人使節
等を招待して一つの部屋に案内し勘定掛り執政役あるべし
といふ人使節等に入來の挨拶をふりたり○使節等此部屋
に暫く留りて此諸坐敷の立方并下院の人々の會合の様子
等を聞けり後又始めの如く國益方の役人より誘われて此場を
去りたり

又來る廿五日我五月廿八日は使節同勢の内十五人之者俺持坦
和蘭の第一の大都但し國王の居る處はあらすは行きて其地の表立たる場所并其
近郊等をも遊覽すべしといふ話あり

又廿三日我五月廿六日は外國掛り執政役ソムフレフといふ人
セー左ニンケンの浴館にて日本人は浴饗應の膳部を出さ
んとて其相伴の爲に執政役諸人饗應掛り役人並奉行物頭
都府年寄役も勿論諸外國の使節をも招く筈あるよし

又近日の内日本使節等和蘭の諸部來丁亞零鳥特立病威立
塞并非里薩等をも遊覽すべしと云ふ話あり

又近日の内は海軍掛り執政役カテンデーケといふ人使節
等を饗應せんとして既に其邸宅の飾り付も勿論園庭にも一
の美麗なる堂上を立て其内にて樂人組より音樂を奏せしむ
る用意をふり居るよし

日本使節和蘭國王に呈せんとして本國より齎し來りたる品物左の如し○染めたる日本絹十卷○無地の日本絹十卷○華麗なる鞍其外馬具一式○頗高價なる太刀二振あるよし殊に日本に於て斯の如き太刀を帶るも西洋にて政事軍事等は大功ありて高貴の位に登りし人の十字の印を付ると同様ある事によりあり

又日本入島持立を遊覽に行くと其地にて和蘭國の貨幣を見せ並貨幣の製造をも見物させ且つペンニングといふ青銅の錢は日本字を打出して使節等に見せんとして其用意をふし居るよしあり

海外新聞別集 九月印刷

原本ロテルダム新聞紙第十三號 千八百六十二年第七月七日即ち文久二年壬戌

六月十一日あり

○日本國使節の事

日本使節我荷蘭國に來り心地よしと思ふんと疑を容るべからず勿論是まで佛蘭西英吉利に於ても甚丁寧なる取扱を受けたり然れども荷蘭に於ての取扱を其親切あることと殊更に勝れり

右使節の人才秀でし事と又其人々の何時何處にても暫の間も銘々の職務を怠らず舉動穩靜ある事とを衆人皆之よ

眼を付しあり又其下役等と諸事見聞しとる事を委しく書
留め本國人民の爲に利益を取らんと思ひ間斷なく勉強せ
り右に付一度往きて不足あるとふどあれど或も今一度往
き度よりを乞ひ或も別人を遣し委しく之を吟味するあり
夫故使節の同勢同日は數箇は別れ諸方は分散せり假令ど
本使の公用にて外出せし時を其餘の者を鹿特堤の病院又
をヘインノールトといふ所を見物しふどして少くも油斷
せざるあり故に日本人の遊行せしとを迎ふ委しく之を書
載すると能はず只其内の著しき遊行と格別ある話とを纔
に爰に述ぶるあり

外國事務宰相祝宴の事

第六月二十三日

我五月二十六日

ニよセヘニンゲンといへる所の浴

亭にて外國事務宰相フンデルマエセンデソムブレフ氏大
ある祝宴を設け日本使節は晝食を馳走せり此時邑中にも
貴客尊敬の爲にとて家々にも三色の染分けたる國旗を立て
列らね浴亭にも日本の旗をも翻せり

立派ある浴亭の樓上にも數多の貴客來會し食卓も善美を
盡し多くの花枝を以て如何にも美麗に飾り立たり

外國事務宰相も右食卓の上席に海の方を背よりて座し海
邊眺望しよきよふに其真向第一の日本使節松平石見守を

座せしめ其余の諸客を一統よて車座をおす右順序も外國
事務宰相の右の方より羅馬教王の使節へレオデ左の方より比
利時國の使節巴倫ジャルジ教王使節の次より國事宰相某其
次より土地利國の使節巴倫ランケナウ軍事宰相某噠國使節
ビルレブラヘ天主教事務宰相某瑞典國使節小侯爵マフニ
ス當村役人其他洲領事務宰相の屬役レルデル日本使節
饗應役掟
役巴倫ソイレン下院の紳士ビールステインドンクルモ
ルヒス饗應
役森山多吉郎柴田貞太郎刑獄事務宰相某阿諾威
國使節巴倫ホデンベルフ海軍事務宰相京極能登守其次を
先より載せしる第一等の日本使節又其次よりゼ子ラールマヨ

ール小侯爵ランレーテン第一等
饗應役是班牙國使節ラハールジ
ヤバト他洲領事務宰相某米里堅國使節パイキ上等評議役
ヨレスゼ子ラールマヨールウルブレニンキコロ子ルベ
ルスレイケン饗應
役外國事務局書記官頭取マセル學士ホフ
マン饗應
役ラチオピソン國王の内使某佛蘭西使節巴倫デラ
ヒレスーレウキス勘定局宰相某英吉利國使節アントレウ
ヒカナン下院の筆頭ランレー子ン其次を即ち先より載せし
る比利時の使節あり
此馳走を實より善を盡し美を盡し諸事高貴なる賓客を請待
する法より適へり夫故事濟て後日本使節の満悦せし由を外

國事務宰相より表向に當樓の主人に言傳へたり扱又右饗應の間は音樂初まりボトコルセキ氏の指揮にて儀式の曲を奏せり此日天氣も十分おらされとも樓下より築山に至るまで夥しく群集せり其後退散の少く以前凡第九時頃日本使節甚奇麗なる着服にて座を立ち居合せたる小兒婦女子等に向ひ例の愛敬よき口上にて手を握り且所持する菓子と與へたり其後日本使節を始め其他の諸賓客も皆其家に歸る

右馳走の指圖役を勤め勝れたる手柄を顯せしを外國事務書記官頭取マセル及び海牙の掟役巴命ソイレンの二人

あり四人の日本使節及び其下役等の喜大方おらず殊に海軍宰相并に其屬官と俱に築山の上に登り頃を一一に快谿の色を顯え其時右築山に居る多くの人と交りまると小童等と親しみ其小童等も花を採りて日本使節に贈れり此盛會は使節の始め來りたる第六時頃にて歸りしと第九時半の頃あり其道筋來りし時も新道を通り歸りし節に古村古道を經たり其節見物の群集最も夥しく殆ど往來も出來ぬむろりあり右の通りにて諸事首尾よく事済めり

海軍事務宰相祝宴の事

同月二十四日我五月廿七日海軍事務宰相カテンデイキ立派なる

晩食を設け日本使節を招きとり其客亭の庭上にて美麗なる花枝を飾りし數多の鏡の光と硝子燈の光とと相映して總體甚盛なる景色なり又庭中にも漢土風と造りたる宮殿ありて見事な燈を耀し其中にて軍中と用ふる音樂を奏せり其他庭中一體の模様極て風致あり凡第十一時頃より饗宴相始り日本使節并其饗應役外國局諸役人諸宰相及び其他の重き役人貴人等夥しく集會せし此時居合せたる貴婦人の装ひ殊に目覺しうり日本使節も右來會の諸人と極めて懇切に相親しみ時刻過後後旅館に歸り其余の

衆客を猶暫の間残りし

右同日饗應の以前は日本の使節等官府の金銀工場は往きたり此工場をホールスコーションといふ所は在りてイム、ス、ン、ケ、ム、ペン氏は屬せしなり其節往來の道筋は日本國旗と和蘭國旗とを多く立列らね又其住宅の樓上にも奇麗なる花枝を飾れり日本使節右住宅は暫時休息の後工作場の内は誘われ其處にて金及び銀の荒金にて色々の肝要なる試験をふし又純精の金銀にて種々巧妙なる細工を爲す所を見たり右工作場の内は留まるる一時をうり過て元の住宅に來り又暫く休息せり其時後日の記念として巧

みよ造りたる國王の半身像を贈れり右像も金地に銀にて
模様を顯せし其上に浮字にて和蘭王維廉第三と書き裏の
方にも謹仰日本國帝之大命千八百六十二年とぞ書きける
其次にニコラ氏フリーレン氏コ氏の蒸氣仕掛の粉挽車
を見物の爲にゲーストブルフに誘われし其節當處の役
人留守中に付フルヒルフ村の役人待請をふし右工局附
の役人案内をふしとり日本使節右仕掛にて挽きたる粉の
精良雪白にして細密なること又其諸事の速なること感服
し殊に其粉の詰卸しの巧みなるに驚けり此饗應役の諸人
日本使節と姑く懇切なる話を爲し此迄日本に此の如き粉

挽車も勿論極めて手輕き仕掛さへも之をふしを知れりさ
れど日本にも粗末なる粉あらざりともふしと見へし故に日
本使節右仕斗見物中此の如き仕掛を將立る爲に入用ある
書物を得しきよしを云出たり凡一時許の間工局見物し其
後暫時休息して歸れり

安特堤府遊覽の事

第六月二十五日

我五月十八日

第十一時半の頃日本使節安特

堤の蒸氣車立場に到着す旋役ブローナルアンセル之を誘
引し兼て定め置きたる休息所に赴きければ當所の役人此所
に迎へり夫より用意の車に乗し當所の役人を第一等

の使節と乗合夫より順序より従て次第より乗よりフラクと名くる旅亭より姑く休息し其後コステル氏の玉細工所より赴き夫より耶蘇教の徒の立置たる幼院を見物し次より手遊屋の店へも一寸立寄り夫より一先旅館へ歸り凡第六時半頃より再び車より乗り國王の館を見物の爲より出掛たり日本使節の到る所いつこよても見物人夥しく群集し旅亭の前ふども宛も圍を請くるゝ如く殊より日本人窓より顔を出し見物の者より會釋ふどり色々の品物および小錢等を擲與へ一時も此群集殊より甚しうりき叔國王の館を一覽しクウベルとて屋根の高き所より登りふどり夫よりオウデケルキと稱する

寺より詣て其後カルフルスタラートといふ町を通り第八時半頃より旅亭より歸る

同二十六日

我五月廿九日

國用造營場より到り夫よりオラニナス

サウと號くる兵卒の屯所を一覽し次よりフリシゲン氏ジックスヘール氏の工局を訪ひしは朝食の馳走あり夫よりボイクスローテルと稱する運上所より到りければ此所のヒルステノウといへる廟所より朝の音樂を爲せり

夕方より和蘭貿易會所よりて食事を爲せり此處を兼て待請の爲より立派より飾付け庭より燈を耀くし且其内より美麗なる小亭を設けスラム氏の音曲を様々より聞けり右

食事の席は列あり人員數多あれど頭立とるも此所の役人某本府警衛の號令官某スコートベイナクトベスセルロイテナントコロチルヤクソン等あり日本使節も右諸役及び來會せる貴婦人等と殊更に懇親す右食事畢て後凡第八時頃旅館に歸りしが其夜も更るまで窓より出て旅館の前は雜沓する諸人の様を詠め居れり

二十七日

我六月朔日

日本使節國用傳信機の場所へ往けり此日を國事宰相局の屬官スターリンクの案内あり右見物すみてトレスリンフ氏の石版所へ往きしは此所にて使節馳走の爲に其眼前にて種々彩色の画を摺出せり日本人之

を見て頗る感服し色々の質問を爲し大に満足の色を顯して此所を立出で次はコーエー氏の砂糖製造所を訪ひ夫より盲人館を一覽し第一時頃及ひ又其所を出て博物館に往きしは此所にも亦夥しき待請の設ありて費用をも惜まらず煩勞をも憚らざる客殿より諸所に至るまで飾付は美を盡しとるを目を駭かすむろりあり其他動物學科の園庭の盛よして我都の光耀を添ふに足れるとも爰に論述するも及むざるべし

晚景はおよひ日本使節逍遙園の夜遊に出會せしが其内數人モスピーケルステラートといへる町のイブスヌーク氏

を訪ひ其眞影所を一覽―自分の眞影をも取ら―めたり夜
遊をスラムプ氏の設け尤も見事―して其燈明就中美麗
り惜むらくも此時俄に暴雨降出せ―により諸人甚と難
―來會せる婦人等も衣裳の爲に殊に大なる故障あり

二十八日

我六月二日

日本使節第十時頃より乗出―當町の

役人及び其余數人―誘もれ當時普請最中なる百工館の周
圍を乘廻―夫より市中の幻院及びタンホウテン氏の倉を
順覽―就中同氏所藏の日本漢土の古物を見て感服―夫よ
り諸家の店に立寄り―其内最も重なる店をハハフル
テ氏ムラス氏タンデルモーレン氏シンケル氏ハルマン氏

等あり第一時半頃―會議所に至り其會議を爲す坐鋪にて
小休の馳走あり其後離別を告るとして安特堤逗留中厚き款
待を受け至極満足の一丁寧なる挨拶を述べ凡第三時半
頃―海牙の道に旅立ちぬ

和蘭王に謁見の事

第七月一日

我六月五日

晝後第五時半頃―日本使節儀式の行列

よて國王の館に仕せり此行列も騎兵一隊と五輛の官車
あり此五輛の内四輛を馬二匹宛よて率き真中の一輛を四
匹の馬よて率するが是れ即ち第一等使節の乗られ―あり
其他乗車の入口よといつれも若黨一人宛扣居り騎兵も右

乗車の前後左右を圍みて守護せしかり途中通行の間をホ
ーレンと名くる樂器と喇叭とを吹立つ是を軍禮と用ふる
音樂よて極めて勇ましく調子かり此時使節を誘引せしを
セルモニーマーストルといふ役人あり此役人事済て後ベ
レフリーと號くる旅館へ使節の歸らるる時もまた送り行
きより使節程おく王の館より到着ありしは館の内よりグレ
ナジールと號くる軍士警固の爲は大隊を備へ使節の入來
を待受け軍法の儀式を以て尊恭の禮を為せり此時外國事
務宰相出迎ひ誘引して國王の前より出て謁見の禮を行む
む右謁見の禮凡半時計もろくれり叔日本使節の國王より言
上せし語を翻譯すれば其大意左の如し

謹白

私共 大君殿下の大命を蒙り今日大王の殿下より拜謁
し奉るる感激の至は堪へず候抑條約取結ひ候てより
以來兩國の交際日くは親密に成行き候之は依て此度
大君殿下親筆の書簡を大王より呈上て聊微衷を表し且
條約の取極を改定せんと欲するを私共は命し取計
らむしめ候其他私共謹で大王の爲は幸福を祈り貴國
萬民の安全を希ひ申候

國王の返答大意左の如し

予今 貴國大君殿下の好意を足下より承知いさゝ大
慶の至は候是よりも 大君殿下の幸福を祈り貴國の
泰平を希ひ候殊は日本と和蘭の交際も條約の定は基
き舊來の好みを繼ぎ此末益張大親密からんとを偏は
期望いさゝ候

此時當所并は諸所より此大禮を見物せんとして其群集せし
と大方あらず然るに此日天氣好うらざりしを實は残念な
る事ありき

二日我六月六日 日本使節王妃世子公達姫君フレデリキ君は見
參す

日本使節國王は贈物として立派なる寶刀を獻す其柄を寶
石にて飾れり世子は獻せし太刀も畧同様あり

六日我六月十日 國王王妃日本使節を馳走の爲はトホイス、テ
ンボスと號くる宮殿に於て午時の大饗を賜ふ其翌日公達
姫君もまゝトホイス、テパウと號くる宮殿にて晝食を賜
ふ

デルフト府遊覽の事

第七月三日我六月七日 日本使節同勢の内十四人より海牙の便
船に乗りデルフト府に來されり第十時頃ハークポール
トと號くる都門に至りければ當地の役人出迎ひ民兵の音

樂よて誘引し用意の車に打乗せ先づ國用の細工所へ連れ
行き夫より少く府城を離れ彈丸の鑄立場を一覽し第一時
頃府城に歸り會議所にて馳走あり其間門前より民兵の
音樂と砲隊の音樂と代るく々奏しとり第二時頃小筒打
立所へ行き夫より耶穌教の新寺古寺を見物す此寺々も世
人の兼て知りし通り古來有名なる人物の像を飾りし處を
り右見物畢て大學校へ臻りしは學士の面々此時既に待受
としてプリンセンサールといふ客殿の中へ集り居れり日
本使節の入來を見て其内よりケウレナールといへる役人
立出て使節へ向ひ貴國と和蘭との交際を年歴淺からず今

日始めて大使へ會するを得て學校の面目一方ならず候
學校中の事へ付ても何事へよらず尋ねたまふとあらむ答
へ申べし且此後日本國の學士と親密なる交を結ひ學問上
の事を成るべきとけ雙方の論説を交易するを得るに至
らむ學校の喜び何事より過さずとぞいひける

日本國の通辨官右學校役人の口上を譯して日本使節へ通
せしは使節大に喜び同一通辨官へ命じ親切友愛の意を蘭
語を以て返答し其後學校役人和蘭譯司ドレンキスル及び其他
の大小學士の案内に従ひ諸雛形類を納めしる所へ入り諸
器物を見て大に感服せり

右見物は姑く手間取りて後學校役人ケウレナール氏の宅
に招かれ其所より休息す此時ケウレナール氏の内室の
招きよて數多の婦人寄添へり使節學校を出る時多人數の
生徒等一列に並び音樂を奏して尊恭の禮を爲せり其後イ
ヘウケンスヘルト氏の毛氈製造所及びレラーズ氏の羅紗
織場を一覽す右通行の間はドンクルモルリス氏の宅にも
立寄り最後は今日諸所を案内する當地役人の宅にも罷
越し夫より暇を告げ車に乗り第六時頃は海牙に歸れり
此日天氣惡く雨降り續けられど何れの所にも夥しく群
集し日本使節は會釋し中にも花を採りて贈る者あり

公館官署の類も勿論市中の家々にも所々には私蘭國旗と日
本國旗とを飾り置けり

來丁府遊覽の事

使節の同勢此度も十六人よて響應役數人の案内に従ひ第
十時頃來丁に來れり其のテポールトと號する都門の少
し先よて俗役并軍役懸りの諸人及び當所の役人ドチブー
ルシーゲンベーク提役セウヒフレフトマヨールイハムテ
ルブルシヘン當所警固の號令官等出迎ひ市中にも所々には
日本並和蘭の國旗を立て列らぬ航海學校の誓古人を土手
よて列を立て尊恭の禮を爲す使節も夫より直に博物館に

趣き其役人の案内にて色々見物して感心せし其内一二
人早急の際にて諸事細うと見るに能くすとして窃に歎せし
由かり此時天氣快晴と及びけれど乗物の戸を開き更に遊
行すべしとて右博物館を出て夫より大學校に到る此處に
ても大學士プ・ル・レイキといへる人出迎ひ日本使節と問答
し其後右大學士の誘引にて學校中を見分し本草局觀象臺
窮理局舎密解剖局に到り學士の指示せる品物及び證據を
見せしる實驗等日本人仰天せざるをふし夫よりハ・ハイ氏
アレホーレ氏に至り呉紹服連及びボレミーン類の工局
を一見す此處にも兼て待受け種々の仕事を爲せしは一々

心を留て見物せり夫より會議所に至り當所村役人民兵の
號令官野戰砲隊の號令官等と面會す夫より猶進みて國用
の大鍛冶局に至る此局を先年日本政府の頼によりて大鍛
冶所の形を造り贈りし所也此處にて當工局附の人員は
誘をれ旗幟と色々の物にて飾りたる客室は通り厚く款待
せられ夫より局中所々の仕事場并は倉等を順覽し就中大
小圓柱形の仕懸にて古鐵を直し桿金又を角金と爲す所を
見て殊の外感心し其外鐵軸錨鏈等大小諸種の製造を一覽
し其後四十一ストレーブ^{我一分三寸餘}の大なる鐵の大鏈を水仕
懸のメ木にて様し此メ木の勢力を示さんとして態々其大鏈

を引切りよりさす。が、伶俐ある日本人も之を大に仰天せり。最後、カラント氏ソーシ氏の羅紗織場を臻る。此處にて、も使節を款待あり。色々の所作、目を驚かせり。以上處々順覽の間、諸貴人婦人等東方の異人を見んとて來りし者多し。此中、花を使節に贈る者も儘ありける。

多分の遊覽にて使節少し疲れし頃、當所役人の宅に誘われ、晝食の馳走あり。其間、民兵の音樂絶ゆるとあり。第八時半頃、に至り馳走の厚きを謝し、右役人の宅を出て都門を出る頃、航海學校の稽古人恭禮を爲せり。總して此使節の來りし所及び往來の道筋等見物の群集せし事を云までもかき事

あり

雜記

二十五日は日本使節安特堤に來りし時、其附屬の日本人等吹聴あり。ヘエンノードに至り、和蘭蒸氣船仲間にて建置する普請場を見物せり。其節、右仲間頭取の案内にて、始終日細工場に留り、夕方及びて海牙に歸れり。又名高き鹿特堤の病院へも右の如く忍みて來り、終日其處に居れり。又ソイデルビルフの醫學所へも日本人七名にて屢來遊し始め。諸器械を熟覽し、其後解剖稽古所に至り、色々綿密ある稽古をあり。其學び得たる事を直し手帳に書留めとり。其後日本

人の伶俐よりて物毎に巧者あるは駭きとありヘンデル
クスといへる人日本人は眼科療治の法を爲し見せし日
本醫師等其習ひしを爲し試みんといひて種々の六指手
術を精密敏捷に爲し遂けとり此時見物の群集夥しうり
し何れも殊の外に仰天す又此度日本人と同道せし人より
オンドロス子イといへる勝れたる學士あり年齢を歴し二
十五歳おれど胸に數多勲爵の表章を懸たる人にて東洋及
び亞墨利加の事を講究する任を受け嘗て東洋言語を學ふ
に善き書籍を著せり此人今度佛蘭西政府の命を蒙ふり
日本人に陪從し日本人歐羅巴諸國を周行する間之は同伴

する由あり

又日本人等程かくソイデルビルフは三度目の遊覽をなす
べしより風聞あり

日本同勢の内は安持堤は行方ざりし者ありて二十七日は
新兵民兵等の訓練を見物に來されり右の日本人は訓練の
理解並業前等少し教へられど彼等其跡にて大砲一挺を遣
ひし諸事能く心得へ其手續き其見事なりワールズドル
フといふ所の原にて訓練ありし節にも彼等來りて鐵砲を
取扱ひまゝ其手際をあらわしあり

まゝ日本使節の内三人連にてイシオースコールといふ

る初心ある者を教授する所は行きとり不意の事にて教頭
并役人等兼て用意も爲さるりうど折角の珍客は萬事を
明に見せしむるは差支へたる事あり日本凡一時む
りの間諸事熟覽し自ら色々の圖取などを爲せり彼等殊
は小兒を教導する人の辛防よきは感心し且其制度の適當
しとる事と人心の歸服し居るは駭けり

國王より命ぜられし日本使節饗應役の者より來因河筋の
堤方奉行へ掛合ひ日本使節を迎へ來因河筋の普請の仕様
を見せ諸事委く説き聞かすべき旨所望ありと右に付近
くの内は日限をさどめ日本使節を誘ひへし子ンビルフの

立場よりリセを越し亞零湖の干瀉の内を通りレーフワト
ルに赴き此處にて干瀉支配の者使節を迎へ馳走の爲は大
仕懸ある機關の運動あるべし夫よりノールドウィキを經
てカト空イキに赴き此處にて使節は食事を進め水門を見
せ諸事を説き聞かせ相濟て後使節を海牙に歸らしむべし
日本人烏特立に來るべき時日をいまだ相分らずと雖此地
逗留中は何れ一度セイスト及びデリイベルヘンへも罷越
し其節まことセイストの陣所をも見物すべし此事既に風聞
ありて夫に待受の用意せり其外時日は猶豫あらをフレ
スウイキの水門をも見物すべきよしあり

日本使節と外國事務宰相と談判の主意を先は日本にて和
蘭及び其他の諸國と條約を取極日本某港を千八百六十三
年第一月一日より開くべきよしを定めたり然れども今ま
は日本にて此定めを姑く延期せんとを求むるよしあり使
節の存意を日本人民猶未だ十分は開けず夫故今俄は所
は於て歐羅巴人と相觸るゝ時も國の太平を害ふに到るべ
しとあり

英吉利は於ても五年の延期を承知せり日本人の求め佛蘭
西は於ても駁として返答なく何れ外諸國と同様の振合
はすべしとあり和蘭政府は於ても延期の事承知せしむ又

を佛蘭西同様の説ふるゝいまど相分らず然れども今日新
は外國事務宰相と應對あり趣ふれども多分右の談判も既
は相済するあるべし

日本使節伯靈の方へ出立すべき日限を第七月七日我六月十一日
と定まりたり然れども殊はよらむ今少し延引すべし其故を

スーストデイキは居ます國王の母君を訪ひまいらすると
否との程いまして相分らざるよしあり

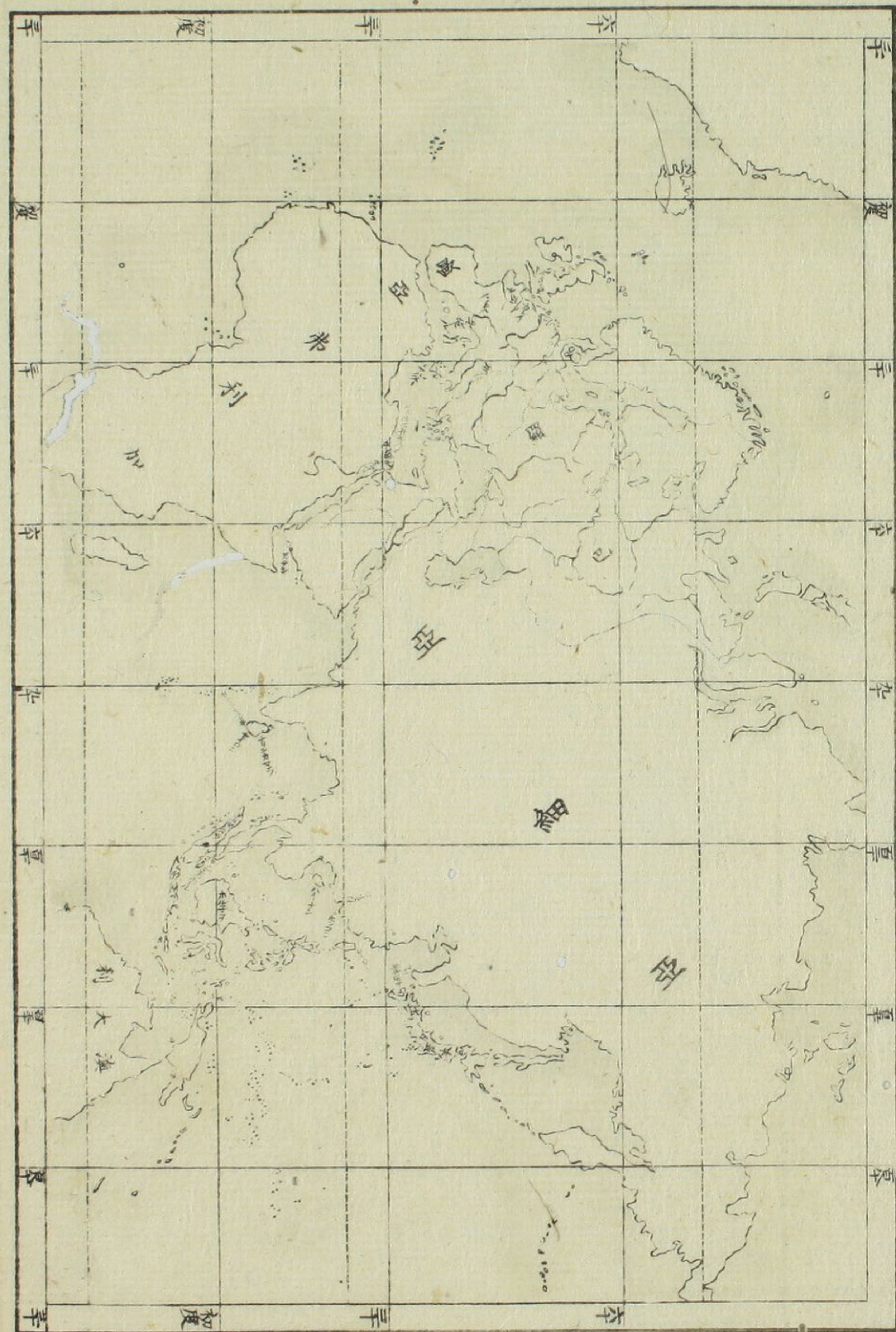
日本使節出立の節を應接役の者之を送りて普魯士境に至
るあるより多分シセルドルフに至り此地は普魯士王の應
接役出迎ひ誘ひ行あるべし

日本使節佛蘭西使節の旅館を訪ひしは折節留守中にて書記官の者出迎へり

英吉利使節と日本使節の爲に祝宴を催せり

日本使節葡萄牙の使節巴命セサルを我方に招けり又安特堤の貿易會所より一人の用達を日本使節に附置しが其者諸品物の見本を持行し日本使節其内より最も本國に關係ある物を指示せり其他日本使節右用達と相親しみ交易の學問及び日本交易に係りたる事等を尋ね問へり

日本使節針路略圖



發閱目錄

舶來蕃書類

官版原書類

同翻譯書類

老皂館

東都豎川三之橋

萬屋兵四郎

